カディスの赤い星（上）

逢坂 剛

カディスの赤い星（上）
逢坂剛
© Go Ohsaka 1989

1989年8月15日第1刷発行
1996年7月31日第13刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-184495-4

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

カディスの赤い星 (上)

逢坂 剛

講談社

目次

プロローグ　一九八六年六月　7
第一章　一九七五年　夏の嵐　12
第二章　サントスを探せ　79
第三章　青春と老残　170
第四章　カディスの赤い星　253

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

《登場人物》

漆田　亮（うるしだ　りょう）	漆田ＰＲ事務所所長
大倉幸祐	同事務所所員
石橋純子	同事務所所員
那智理沙代	広告会社萬広ＰＲ局　ＰＲウーマン
河出弘継	日野楽器　広報担当常務
新井進一郎	日野楽器　広報室長
槙村真紀子	全日本消費者同盟　書記長
槙村　優	その息子
大野顕介	太陽楽器　取締役宣伝部長
坂上太郎	関西のギタリスト
津川　陽	ギタリスト　通称パコ
清水宏紀	ギタリスト　通称マノロ
高井修三	ギタリスト　通称サントス
佐伯浩太郎	ギタリスト　通称アントニオ
オイワケ	フラメンコの歌い手
ラモス	スペインのギター製作家
フローラ	ラモスの孫娘
サンチェス	治安警備隊の少佐
セレスティノ	その部下
フェルナンド	同
ビクトル	同
ロドリゲス	秘密警察ＢＰＳの刑事
ロコ	右翼団体ＪＥＤＲＡの攻撃隊長
マタリフェ	その部下
アンヘル	左翼過激派ＦＲＡＰの闘士

カディスの赤い星 (上)

プロローグ　一九八六年六月

その朝、わたしは社長室のデスクにすわり、ディクタホンのマイクに向かっていた。

「ご承知のようにこの五月には、イベリア・スペイン航空のわが国への直行便乗り入れが実現いたしました。これによって、スペインと日本は近い将来、実際の距離を忘れさせる親密な関係を築くことになりましょう」

「今年初めＥＣ加盟を果たし、三月には国民投票によってＮＡＴＯ残留を決めたスペインは、ヨーロッパへの同化を着々と進めております。今回の総選挙においても、フェリペ・ゴンサレス首相の率いる社会労働党が順当な勝利を収め、国民が安定した左翼政権に合意を与えたことが確認されています」

「また今年一九八六年は、スペイン内戦が勃発してからちょうど五十年めに当たります。わが国でも、すでにそれに関連する雑誌の特集や、研究書の発刊が出版界を賑わしております。すなわち現代史の分野からも、今スペインに対して熱い視線が向けられているわけであります」

「さらに六年後の一九九二年には、コロンブスのアメリカ大陸発見五百周年を迎えるほか、それを記念してバルセロナにオリンピックを、またセビリヤに万国博覧会を誘致する動きが強まって

おります」

「このようにスペインは、間違いなく今後数年にわたって、世界の注目を浴びることになるでしょう。その機を捉え、さまざまな角度からスペインをテーマにしたＰＲキャンペーンを推進展開し、長期的な観点から御社のイメージアップを図ることは、国内市場はもちろん国際戦略上も、大いに利益をもたらすものと確信いたします。以上」

「ここまでの分を、日野（ひの）楽器のＰＲキャンペーンの企画書の最後に付け加えるように手配すること」

ボタンをオフにして、マイクを置く。

日野楽器は社の最も古い得意先の一つで、わたしたちは今スペインにからんだＰＲキャンペーンの企画を提案しようとしている最中だった。

ソファに移り、積み上げたスペインの週刊誌を手に取る。企画立案の資料として、ここ半年ほどのバックナンバーを倉庫から出して来たのだ。あまり読む時間がなく、だいぶ見落とした記事がある。

わたしはその中から面白そうな記事を拾い読みした。

コロンブスの子孫で、現役の海軍中将のクリストバル・コロンが、過激派のＥＴＡに暗殺された話。

現職のマドリード市長で、法学博士のティエルノ・ガルバンが病死した話。彼はＰＳＯＥ（社会労働党）の名誉議長であり、左翼の象徴的存在だった。

フランコ総統死後十周年の記念特集。これは「フランコの歴史的審判」と題して、昨年秋数週間にわたって連載されたものだった。

その記事を流し読みしているうちに、ある箇所が偶然のように目を射た。一瞬背筋に電気が走り、動悸が速くなる。十年と少し前のことが、突然脳裡に蘇ってきた。

特集記事の中に、フランコ総統の死に関するくだりがあり、そこに予想もしない事実が暴露されていた。

わたしは急いでその前後に目を通した。

記事の要旨はこうだ。

一九七五年に死んだフランコの死亡日時は、実際の死よりも一日遅い日付で発表された。それはフランコの命日を、ホセ・アントニオ・プリモ・デ・リベラの命日と同じにするための、政府の操作によるのだという。

ホセ・アントニオは、一九三三年に政治結社『ファランヘ党』を創立した、有名なファシストのリーダーだ。ファシストでありながら、左翼の一部からもてはやされるという不思議な魅力の持ち主で、一種のカリスマ的な存在であった。しかし彼は、内戦が勃発した一九三六年、ときの共和国政府から反乱の指導者の一人とみなされ、銃殺刑に処された。わずかに三十三歳という若さである。

フランコは内戦で勝利を収めたのち、彼の英雄的な死と名声を自分の権勢に利用するため、国中の都市の主要な広場や目抜き通りに『ホセ・アントニオ』の名前をつけた。そのおかげで、ホ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

セ・アントニオの名はますます神格化され、ついに伝説的人物になる。

問題の記事によれば、フランコは実際のところ一九七五年の、ホセ・アントニオの命日の一日前に死んだ。しかし命日を彼と一致させることによって、フランコの死を同じように神秘化し、伝説化しようと考えた当時の閣僚が、死亡日時を一日遅らせて発表したというのである。

わたしは腕を組み、窓の外を眺めた。梅雨空に、重い雲が垂れ込めている。雨はやみそうにもなかった。

五年ほど前、事務所を会社組織にして、この新しいビルに移転した。オフィスはだいぶ広くなり、社員の数もふえた。十年前には考えられなかったことだ。

いつの間にか、手が汗ばんでいる。

もしこの週刊誌が伝えるとおり、フランコが一日早く死んでいたとしたらどうだろう。もちろんそれによって、スペインの歴史が変わるわけではない。しかしわたしにとってそのからくりは、いささか意味のあることだった。

インタホンのブザーが鳴る。

現実に引きもどされた。デスクへもどる。

「なんだね」

「専務がお部屋にうかがいたいとおっしゃっておられますが、よろしいでしょうか」

秘書の事務的な声が流れて来た。

「いいよ。コーヒーを二つ入れて、ついでにディクタホンを持って行ってほしい。日野楽器の企

画書の続きだ。すぐに専務を通してくれたまえ」
窓際へ行き、隣のビルの屋上を見下ろす。コンクリートに雨が躍(おど)っていた。
ガラスに映った自分の顔を見る。
あれから十年――いや、そろそろ十一年になるのだ。十一年前、一九七五年の夏にそれは始まった。そしてその秋、わたしは一度死んだのだった。
ドアにノックの音が響く。わたしは向き直った。
「どうぞ」

第一章　一九七五年　夏の嵐

1

新井のがらがら声は、いつになく緊張していた。
「ちょっと面倒なことになったんだ。すぐに来てくれないか」
新井が冗談を言わずに用件を切り出すのは、めったにないことだ。
「どうしたんですか、いったい」
「たった今、全日本消費者同盟の書記長と称する女性から電話があってね。槙村と名乗っていたが、心当たりはないか」
「名前を聞いたことはあります」
「その槙村書記長とやらが、午後一番で河出常務のところへ来る。用件は、日野楽器のギターについて、一般の消費者から欠陥楽器の訴えがあったので、見解を聞きたいというんだ」
「欠陥楽器。ギターが爆発したとでもいうんですか」

「うちのギターは、ニトログリセリンを使わずに作っているんだがね。知らなかったのか」
新井はそっけなく応じた。相当機嫌が悪い。
「すると、どんな欠陥ですか」
「それがあちらさんは、詳しいことは電話では言えないと、そう言うんだ。仕方がないから、こっちへ来てもらうことにした。おれは全日本消費者同盟なる団体のことはよく知らんし、槙村書記長のブラジャーのサイズも知らん。だからきみの知恵を借りたいんだ。そのために月づきのフィーを払ってることは、もちろん承知しているだろうね」
わたしは承知していると答え、できるだけ早く行くと約束して電話を切った。
新井には、好きなときにわたしを呼びつける権利があると考えるだけの、正当な理由がある。わたしは所員が二人しかいないPR事務所の所長で、新井はわが事務所最大の得意先、日野楽器の広報室長だった。
わたしの事務所は、四谷本塩町のビラ・コンチネンタルというシティ・マンションの五階にある。父親が遺した千葉県船橋市の山林を売り、二年前に二部屋ぶち抜きで購入した、住居兼用の事務所だった。
わたしが秘書と呼び、自分では雑用係と称している石橋純子が、お茶を入れてくれた。
純子は、わたしが新聞で秘書を募集したとき、ただ一人誤字脱字のない履歴書を携えて来た娘だ。すでに二十五を過ぎており、お世辞にも美人とは言えないが、愛嬌があってよく気が回る。頭の回転も早い。ひどい汗かきで、夏場はいつもブラウスの背中を円く濡らしている。

「新井さん、ご機嫌悪かったでしょう」
純子はくりくりと目を動かしながら言った。
「うん。しゃべりながら電話をかじっていたよ。ええと、消費者団体のファイルの中から、全日本消費者同盟というのを探してくれないか」
純子がそれを探している間に、わたしは厚生省の記者クラブへ電話をして、知り合いの記者をつかまえようとした。つかまるわけがなかった。朝の十時半にクラブに出て来るような真面目な記者は、PRマンと友だちになったりしない。
ここにあるPRの仕事に必要なデータは、ほとんどすべて純子が作成し、まとめ上げたものだ。新聞社の各部長、週刊誌の編集長のリスト。それぞれの現場記者のリスト。テレビのショー番組のディレクター、プロデューサーのリストもある。
そうした資料の中には、もちろん主要な消費者団体、婦人団体のリストも含まれている。わたしは、純子が出してくれた全日本消費者同盟のファイルにざっと目を通し、簡単にメモを取った。槙村書記長のプロファイルも、かなり詳しく書き込んである。新聞や雑誌の記事から、純子が抜粋して作成した貴重なデータだ。
純子に留守を頼み、事務所を出た。
日野楽器は、業界でも五本の指にはいる大手メーカーで、京橋の一角に六階建ての社屋を構えていた。ここの広報室は、三年ほど前わたしの提案によって設置された。
まだ大手のPR会社に在籍していたころだが、ある日日野楽器の常務の河出と名乗る男がわ

たしに電話をよこして、企業のPR活動のあり方について話を聞きたいと言ってきた。河出は、わたしがある専門誌に寄稿したPR活動に関する雑文を読んで、興味を引かれたのだと言った。

それがきっかけとなって、わたしは日野楽器にPR活動に関するプレゼンテーションを行ない、月額五十万円のPRコンサルテーションの扱いを獲得した。そしてその年のうちに、PR誌やイベントを含めて、年間一千万円を越すPR予算を取るまでの得意先に育て上げた。

二年前に自分の事務所を開いたとき、わたしは会社と日野楽器双方の了解のもとに、その扱いを持って独立したのだった。

わたしは、大きなテーブルに灰皿が一つしかない会議室で、しばらく待たされた。たばこを一本吸い終わったとき、常務の河出が新井を従えてはいって来た。

河出弘継は五十代半ばの、いつも仕立てのいい服を着た、口数の少ない男だった。必要なとき以外はめったに口をきかないが、黙っていてもその場の雰囲気を支配する独特の存在感を持っている。

新井進一郎は、河出より一回り若い四十代の半ばで、いつも仕立ての悪い服を着た、口数の多い男だった。骨張った体つきをしていて、いつも髭の剃りあとを青あおとさせ、顔色が悪い。眉は太いマジックで書いたように濃く、端がぴんと跳ね上がっている。

挨拶をすますと、二人はテーブルを挟んでわたしの向かいにすわった。

新井は腕時計を見て、すぐに切り出した。

「それで全日本消費者同盟というのは、どういう団体なのかね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com